

雛の間にねむる蒲団を竝べけり

藤田湘子

昭和五十八年、五十七歳の作。この年の二月四日、「これよりは俳句無頼や寒の梅」の一句から三年間に渡る「一日十句」の修行が始まった。

そして、同月二十六日の十句の中から四句が第六句集『一個』に収載され、この句が残されている。

銜いのない平凡な日常の一句である。それだからこそ胸を打つ。娘を持つ一家の平安、それは安らかな眠りにこそ象徴される。

先生と呼ばれる俳人誰もが、和服姿で大豪邸に住んでいる訳ではない。小市民として横浜緑区の住宅街に家を建て、二人の娘達は雛段を飾った部屋に蒲団を並べて眠ったのだろうか。親子同室なら、もつと幸せだろう。

1983年 (558作) 第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩